平安時代

調査地の南東側からは平安時代の土器が多く出土する落ち込みが見つかりました。

この落ち込みは、湧き水によって生じた地すべりと推定される後のへこみに土器を投棄したものとみられます。

写真５　落ち込みの一部から出土した土器

写真６　出土した土器（手前中央は緑釉陶器）

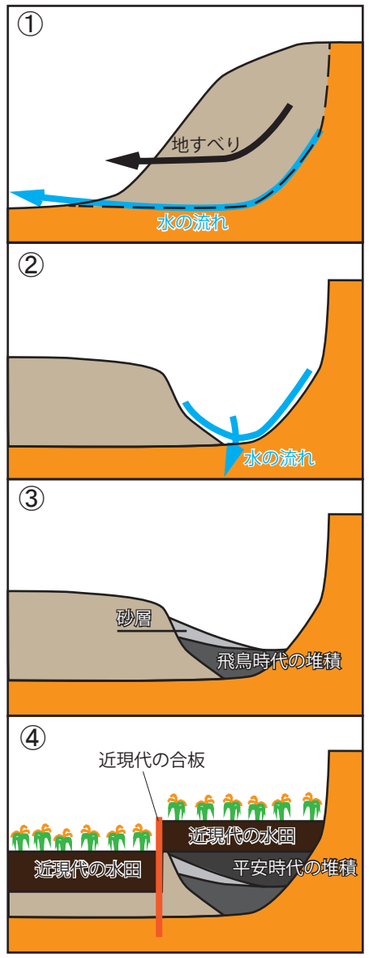
①谷によって形成された緩やかな斜面には地下水が流れていた。

②斜面の土砂が地下水によってずり落ちる。

③へこみに土器が捨てられ（飛鳥時代）、斜面から水が流れ、土砂

④残ったへこみに多量の土器を捨てる（平安時代）。

その後近代に水田として開発される。



第３図　落ち込みの形成過程

まとめ

今回の調査では、飛鳥時代と平安時代の遺構と遺物を確認しました。調査地中央の谷の南西側の斜面で複数の建物群や、湧き水によって形成された流路などを検出しました。

谷は長い時間をかけて、雨水が流れ込む激しい流れと湧水のみが流れる緩やかな流れを繰り返し、時には沼のように水が溜まり、自然堆積層を形成しました。そして飛鳥時代から利用されはじめたようです。谷の南西側に位置する建物群には、谷の利用と同時期に人々が暮らしていたと推察されます。

また、飛鳥時代の流路からは、土器などと共に多量の桃の種が出土しました。古代において、桃は祭祀を行う際に邪気を払うために用いられることがわかっており、小中田遺跡で生活をしていた人々も、こうした祭祀を行っていたと考えられます。

本遺跡は、丹後地域の古代における集落の立地や水の扱いを考える上で貴重な資料であり、土地利用と人々の営みが垣間見える遺跡です。

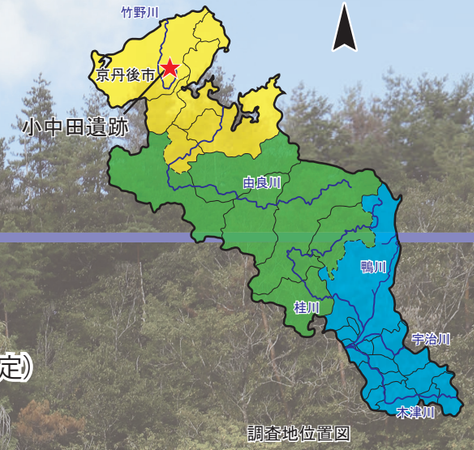
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3
http//www.kyotofu-maibun.or.jp

WEB　X（旧 Twitter）　Facebook

京埋セ現地説明会資料 24-6
令和6年 11 月 16 日（土）

小中田遺跡（こちゅうだいせき）

調査場所　京丹後市大宮町河辺（こうべ）地先
調査期間　第１次　令和５年 12 月４日～令和６年２月 29 日
　　第２次　令和６年 5月７日～令和６年 11 月下旬（予定）
調査機関　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター



調査地位置図

はじめに

調査は一般国道 312 号大宮峰山道路事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施しています。

小中田遺跡は丹後半島中央部の中郡盆地を南から北へ流れる竹野川の東方に位置します。遺跡は丘陵地の谷奥に位置しており、主に飛鳥時代から平安時代にかけての遺跡であることがわかりました。

第１図　調査地位置図（S=1/ 25,000）

発掘調査の成果

今回の調査では、飛鳥時代の流路や建物群、柱穴群、土坑などのほかに、多くの土器を廃棄した平安時代の落ち込みを確認しました。

緩やかな傾斜面をもつ谷の南西側では、飛鳥時代の竪穴建物群や溝が見つかりました。調査区中央の谷の奥には湧水点があり、飛鳥時代には流路に流れる湧き水を利用していたと考えられます。谷の南西側に暮らした人々は、湧水点を水源とし、周辺で祭祀を行っていた痕跡が認められます。

飛鳥時代

竪穴建物は、谷の南西側斜面で３基見つかりました。そのうち２基は重複していることから、建て替えられ、一定の期間にわたって暮らしていたことがわかります。竪穴建物床から、「L」字形のかまどの一部が見つかりました。周辺からは鉄滓（てっさい）が出土し、集落内で鍛冶が行われていた可能性があります。水源に近く、手工業に必要な水の確保に適した集落立地であったと考えられます。

写真１　竪穴建物１・２

竪穴建物１　長軸５m× 短軸残存長約３m
竪穴建物２　長軸約５m× 短軸残存長約４m

写真２　竪穴建物３

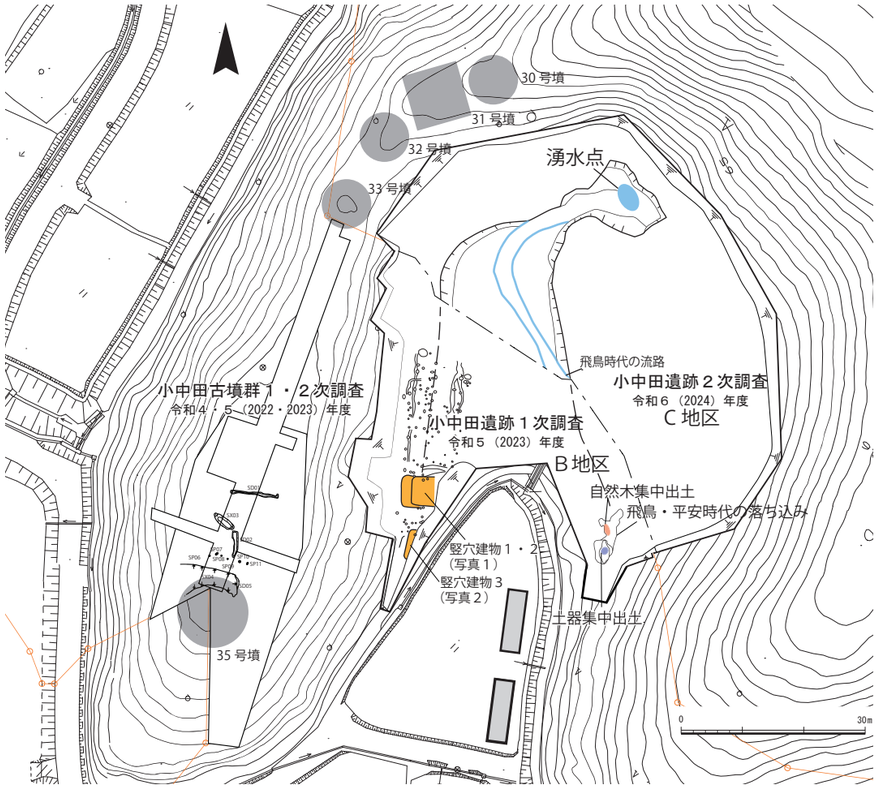
竪穴建物３　長軸５m× 短軸残存長１m

写真３　流路から土器と燃えさしが出土した様子

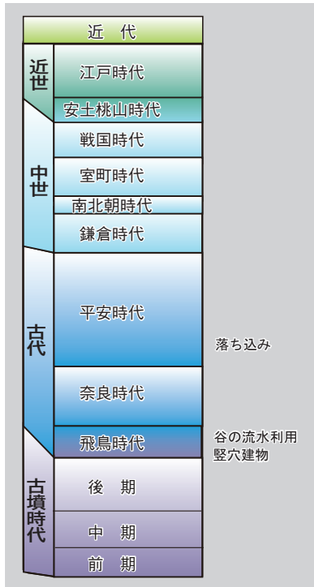
写真４　桃の種子がまとまって出土した様子

谷の奥には湧水点があり、湧き水は谷の中央部に形成された流路（幅約 0.7 ～ 1 m・検出長約 15m）を流れます。流路の下流は後世に削平されていて確認できませんが、竪穴建物群の東側を流れていたと考えられます。

流路の中からは、多量の桃の種や先端が焦げた木材（燃えさし）などが出土しました。桃の種は古くより祭祀に用いられる種実として知られており、小中田遺跡では水源となった湧水点への信仰にもとづく、水辺の祭祀が行われていたと推察されます。



第２図　調査平面図（S=1/1000）



第１表　年表